

福島第一原発事故から10年を目前に宣言する

「東海地震もそこまで来てる / けどもまだまだ増えていく / 原子力発電所が建っていく」

忌野清志郎は33年前から知っていた。原発の脆弱性と、そのウラに潜む悍ましい構造を。彼だけでなく、ここ和歌山で、世界中で、警鐘を鳴らす人びとは大勢いた。なのになぜ…この詩が生まれた当時34基だった日本の原発が54基まで増え続けたのか。

「日本の原発は安全です / さっぱりわかんねえ / 根拠がねえ」

嘘で塗り固められた安全神話は、福島の事故で完全に崩壊した。だから世界各国から次々に原発を止める政策が打ち出されたのだ。なのになぜ…日本政府は未だ原発推進の姿勢を崩そうとしないのか。

あれから10年を目前にして、改めて問う。

日本政府や東電が行った原発事故に関する検証は適切だったか？

被災者・避難者への補償やケアは充分だったか？

子どもたちや自然環境への放射能リスク回避はなされてきたか？

東北の真の意味においての復興は進んでいると言えるか？

答えは全て”NO”。本当になんてことだ。

それでも、落胆ばかりしてられない。

こんなにも酷い現実にも挫けることなく、支えあう人がたくさんいることを知ったから。

泥中の蓮のごとく、美しく心清らかな、愛すべき人たち。

出会えたことに心からのありがとうを送ります。

わたしはこれからも清志郎のように、無関心の壁に怯むことなく声をあげ続けます。

「電力は余ってる / 要らねえ / もう要らねえ」

「原子力は要らねえ / 危ねえ / 欲しくねえ」

2021/02/12（旧正月） なかむら いづみ

本の紹介 孤塁 双葉郡消防士たちの3・11 吉田千重 岩波書店

◇ 著者からのメッセージ

2011年3月12日。東京電力福島第一原子力発電所の1号機爆発の映像は、誰もが驚きをもって見守っていたのではないのでしょうか。その画面の向こう、爆発現場の数キロ地点で、住民避難誘導、避難広報、そして救助・救急搬送活動を必死に行なっていた消防士たちがいました。

その双葉消防本部のみなさんに初めて会ったのは、2018年10月のこと。そこから1年ほど通い、当時活動をしていた消防士66名から話を聞き、さまざまなことを教えてもらいました。その想像を絶する過酷な活動は、原発事故が「なかったこと」のように語られる現在こそ、知らなければならぬと改めて感じています。

これまで、多くの被害者・避難者から、それぞれが抱えさせられた原発事故の被害を聞いてきました。そしていま、それぞれの立場の違いから「被害の語りにくさ」が色濃く広がっています。その一方で、「今、やっぱと話せる」ということもある。そういった事実を、一人の小さな声を、書き手としても、隣で生きる一人としても、大切に受け取りたいと思っています。(略)

